

少年とマント

- 1 五月三日のことでした
カーライルへとやって来たのは
親切で礼儀正しいひとりの少年
知恵も豊かな少年でした
- 2 少年は
チョッキとマントに身を包み
ブローチと指輪で
飾り立てておりました
- 3 上等の絹の服を
腰のあたりでしぼっており
身だしなみの不作法は
不名誉と心得ておりました
- 4 「食卓にお座りのアーサー王さま
ご繁栄をお祈りします
善良なる女王グィネヴィアさま
ゆめゆめ忘れはいたしません
- 5 「広間にお集まりの高貴な皆さま
ご注目くださいますよう
憶病者と
ご自分でお認めでないならば」
- 6 少年は すばやく
小袋を取り出して
二個のクルミの間に
きれいなマントを広げました
- 7 「アーサー王さま
どうかお受け取りください
このマントを美しい女王さまに差し上げます
きつと ぴったりお似合いのはず
- 8 「一度でも不義をはたらいたご婦人には
合わないマントでございます」
アーサー王の宮廷に集まった騎士たちは
奥方のことが気になりました
- 9 グィネヴィア女王が進み出て

マントに近付きました
女王は新しもの好き
でも 内心はビクビクでした

10 女王はマントを着てみると
ぷりぷり怒りだしました
まるで鉄で切ったように
上から下までボロボロでした

11 一瞬 マントの色は赤になり
次の瞬間 緑になり
その次の瞬間 青になり
ちつとも女王に似合いません

12 それから マントはどす黒くなり
汚い色になりました
「誓って」とアーサー王
「おまえは貞淑な妻ではないな」

13 女王は
きれいなマントを投げ捨てて
真っ赤になって
自分の部屋へ逃げました

14 女王は
マントの織手と仕立屋を呪いました
そのマントを持って来た
少年に復讐を誓いました

15 「アーサー王の宮廷で
辱^{はづかし}めを受けるくらいなら」
「緑の森の
木陰にいたほうがよっぽどましよ」

16 円卓の騎士ケイが奥方に
側に来るよう言いました
「奥方よ やましいことがあるのなら
どうかこのまま 近付かないで」

17 ケイの奥方は

すぐさま前へ進み出て
大胆にも
マントに近付きました

18

ケイの奥方が
マントを手に取り着てみると
お尻のあたりが
丸見えになりました

19

アーサー王の宮廷にいた
騎士たちは皆
この見せ物に笑い興じて
叫び声を挙げました

20

ケイの奥方は
きれいなマントを投げ捨てて
真っ赤になって
自分の部屋へ逃げました

21

老いた騎士が進み出て
ぶつぶつ何か言いながら
ご褒美の二十マルクを
少年に渡しました

22

クリスマスの間中
よろこんでご馳走しようと言いました
というのも 老いた騎士は奥方に
このマントを試させようと思ったのです

23

老いた騎士の奥方が
布製のマントを着てみると
髪飾りが一本と糸が一本
その身に残っただけでした
アーサー王の宮廷にいた騎士たちは皆
お気の毒にと言いました

24

老いた騎士の奥方は
布製のマントを投げ捨てて
真っ赤になって
自分の部屋へ逃げました

25

円卓の騎士クラドックが奥方に
入って来るよう言いました
「奥方よ すまないが
このマントを着てみてくれ

26

「奥方よ このマントを着てみてくれ
ぼくの妻になつてから
不義をはたらいていなければ
これは必ずおまえのもの」

27

クラドックの奥方は
すぐさま前へ進み出て
大胆にも
マントに近付きました

28

クラドックの奥方が
マントを手に取り着てみると
きれいなつま先まで
マントはしわしわになりました
「マントよ お控えなさい
わたしに恥をかかせないで

29

「過ちを犯したのは
本当に一度だけ
それは 緑の木の下で
クラドックにキスしたとき
ふたりが結婚する前に
クラドックにキスしたとき」

30

クラドックの奥方が
犯した罪を告白すると
マントは奥方の身に合わせて
元通り きちんとなりました

31

色は品よく
黄金のように輝きました
アーサー王の宮廷にいた騎士たちは皆
クラドックの奥方を見ました

32

すると グイネヴィア女王が
アーサー王に言いました

「あの女がマントを手に入れてしまったわ
権利もないのに 策略で

33

「純情そうなふりをした
あの女をご覧なさいな
あの女のベッドから

十五人の情夫が帰るところを目撃したわ

34

「司祭に牧師に女房持ちの男たちが
あの女の寝床からそそくさと
なのに マントを横取りして
純情なふりをするなんて」

35

すると マントを持っていた
少年が言いました

「アーサー王さま 女王さまをお諫めください
あまりにもひどいおっしゃりよう

36

「女王さまは鬼婆
売女も同然
アーサー王さまは 高貴な皆さまの目の前で
かわいそうな寝取られ男」

37

少年が立ち上がり
扉の方を見ると
そこには一匹の野生の猪
人を襲うかもしれません

38

少年は木製のナイフを抜いて
すばやく 向こうへ駆け出すと
いっばしに
猪の首を捕まえました

39

驚くほど大胆に
少年は猪の首を捕まえました
「寝取られ男のナイフでは
猪の首は刎ねられません」

40

砥石の上で

ナイフを研ぐものもおりました
テールの下にナイフを投げ込み
知らん顔するものもおりました

41
アーサー王と少年が
一同を見回すと
ナイフの刃は
いつのまにか元通り

42
クラドックの持っていた小さなナイフは
鉄と鋼はがねでできていました
たいそうみごとに
猪ししの首を刎はねたので
アーサー王の宮廷の騎士たちは皆
臍ほぞを嚙かみました

43
少年は
純金の角笛を持っていました
「寝取られ男は
この角笛で酒は飲めません
飲もうとしても
前や後にこぼしてしまうのがおち」

44
肩の上に酒をこぼしてしまうもの
膝の上に酒をこぼしてしまうもの
角笛を唇にあてられず
目にあててしまうもの
それこそは寝取られ男
皆が見ている前でした

45
クラドックは
角笛と猪ししの首を勝ち取りました
クラドックの奥方は ご褒美に
このマントを勝ち取りました
こんな素敵な奥方に
神のお恵みがありますように